

週報

こひつじ

第40巻 3号
大津キリスト教会
菊池郡大津町室 119
TEL 096-293-4470
FAX 096-293-4961
牧師 米村 英二

私の友人で倉敷教会に通われている萩原直幸さんという方がいます。岡山大学のフランス語の先生です。その方が、ご自分の教会の月刊誌『まきば』に「私の好きな賛美歌」という題で、以下のような記事を書いておられました。信仰の初期、大津キリストチャンシンガーズの歌が印象に残ったとありましたので、皆さんに紹介したいと思います。

私の好きな賛美歌

萩原直幸

私がキリスト教に導かれたのは 校生たちが教会につながる妻との出会いによつてです。 なり、彼らは「大津キリストチャンシンガーズ」として礼拝の中で賛美をするようになります。 二牧師の説教テープを大量に渡さ 当時（一九七〇年代）は、フォークソングが流行った時代で、それこそフォークギターを弾きながらメロカ人宣教師が開拓した小さな教会を任された米村牧師は、地元た。

阿蘇の外輪山を望む片田舎にアメリカ人宣教師が開拓した小さな教会を任された米村牧師は、地元た。の高校生たちに英語を教えて生計 説教テープの中には「主は道を立てていたようですが、その高造られる」や「シャイン、ジーザ

ス、シャイン」などの曲が流れていました。特に私の注意を惹いたのは聖歌五八九番の「恵みの高き嶺」でした。

とりわけ二番の歌詞が私の心をとらえました。

恐れのある地に
などかは留まらん
疑惑の雲をば
早く下に踏まん

光と聖きと
平和に満ちたる
恵みの高き嶺
われに踏ましめよ

九番「ああうれし、わが身も主のものになりけり」を実感するようになりました。まさに原詩にあるように、

This is my story,
this is my song.

であり、「すくわれし身のさち」を味わっています。

以前はキリスト教でいうところの「救い」「救済」「救われる」ということの意味がよく分からなかったのですが、今ではイエスがいともそばにいてくださるということが救いなのだと感じています。歌や音楽には、時に人を勇気づけ、時に人を救う力があります。

当時の私にとってキリスト教は疑問だらけで、処女懐胎？ 奇蹟？ 復活？ 永遠の命？ 最後の審判？ とモヤモヤしていたので（今でも疑問が解消したわけではないのですが・・・）、それをなんとか吹っ切りたいという思いがあったことが背景にありました。

さて、その後の経緯により受洗に導かれた私は、讚美歌一編五二

今日の礼拝

○第一礼拝は午前一〇時から、第二礼拝は午前一一時から。

○教会学校は午前10時から。
○説教は米村牧師。

今年の決意

今年のローズンゲンの聖句は、「いっさいのことを愛をもって行ないなさい（第一コリント一六の一四）」です。

ヒルティは言っています。

人は老年になり、やがて人生を終えるだろう。が、それまでになお残されている最後の課題があるそれは「より多くの愛を習得するということだ」と。

愛だけが天国へもつてゆけるものなのでしょう。

私の最後の課題も、どれだけ妻にやさしくできるかです。少なくとも昨年よりも、よくそれを成し遂げられたらと思います。どうか私のためにお祈りください。

また皆様には、不十分な私を長い間、受け入れてくださって感謝しています。

早朝の散歩、そして朝七時から祈り会は今年も続けるつもりです。また説教も週報の発送も、主

が力を与えてくださるかぎり、続けたいと思っています。少しでも皆様のお役に立つことができれば幸いです。

北海道の旅

雪の北海道から帰ってきました。一月一五日（月）～一九日（金）まで毎朝二回の五五分の授業をするのが今回の滞在の目的でした。

昨年、多くが卒業し、今年の入学者が少なかつたため、在校生はわずかに八名でしたが、近隣の教会からの聴講者があり、ミヤンマーに長く宣教師として働いておられた伊藤夫妻の参加もありました

ので、毎回の受講者は一五、六名でした。

学生たちは全国各地から来ていました。札幌市、東京都、神奈川県、富山県、大阪府、岡山県、香

川県などです。

今回は、申命記から話しました。学院での授業のほか、何組かの

牧師夫妻と、食事をしながらの交流の機会もありました。

そして一月二一日の礼拝は菅原

ノルディックウオーキングのポールを前もつて送っていたので、

毎朝の散歩は続けました。それを使うと雪道も楽に歩けるのです。

最後の日は鍛冶川夫妻の招きで登別の温泉で一泊しました。雪の中に多くのビルが建ち並ぶ巨大な温泉地です。北海道のスケールの大きさに驚きました。

牧師の教会で説教させていただき、旧知の方たちとお交わりもできました。

そして二二日、朝食をすませると、午後二時四〇分発の羽田行き

の飛行機に乗るため、千歳空港に向かいました。午後には雪が降り始めるとの予報でしたが、その通りになり、空港で待っている間に

視界ゼロの悪天候です。心配しましたが、私たちの飛行機は何とか

飛んでくれました。その後、多くの便が欠航したらしく、そのこと

とは翌日のニュースで知りました。

東京では、長男の耕一家族と食事をして、翌日は妻の姉を見舞うため千葉県の鎌取駅近くの施設を訪ねました。最後にわずかな時間を

神田の古書街で過ごしました。七

五年の歴史をもつキリスト教専門古書店「友愛書房」は昨年閉店し、

英文学の本で親しんだ田村書店も週二日の営業となっており、残念

ながらその日は閉まっていました。

それでも次の三冊を買いました。

①『矢内原忠雄』（東京大学出版会）
②『聖書に聴く』（小塩節著）
③『イギリス文学論集』（平井正徳著）

こうして一〇日間にわたる旅が終わったというわけです。

帰った翌日、不要の厚手の服など入れた荷物が届きました。以下は送ってくださった事務スタッフの方から、荷物を送ったという通知とともに書かれていた言葉です。

「先生の授業を聞くたびに、先生のような、うちからにじみでるすばらしい内面の持ち主に私もなり

たいという願いが起ります。その願いを持ちつつ、これからの人生を歩んでいきたいです」

私にそんな内面の豊かさなど、あるはずもないのですが、それを求める願いはもっているつもりです。それが少しでも伝わったとすれば、うれしいことだと思います。
